

29

プリントアウトした請求票は、所蔵部署階のカウンターにお持ちください

111年06月07日 11:38:56

111年06月07日 11:38:56

入館証番号:

入館証番号:

Call Slip

<請求票>

| |
|-------|
| 368.2 |
| 5119 |
| 1942 |

Call Slip

<請求票>(控)

資料名: 土幕民の生活・衛生

巻次:

著者名: 京城帝国大学衛生調査部 || 編

出版者: 岩波書店 頁数: 316p

大きさ: 21cm 出版年: 1942.8

書名

資料名: 土幕民の生活・衛生

巻次:

著者名: 京城帝国大学衛生調査部 || 編

出版者: 岩波書店

出版年: 1942.8

大きさ: 21cm

頁数: 316p

切り取り

所蔵館: 中央

所蔵部署: 1階資料お渡し・返却カウンター

配置場所: 1/261 中)2F社会(閉)

資料ID: 5018478793

所蔵館: 中央

所蔵部署: 1階資料お渡し・返却カウンター

配置場所: 1/261 中)2F社会(閉)

資料ID: 5018478793

| 請求記号 |
|-------|
| 368.2 |
| 5119 |
| 1942 |

| | | |
|--------------------------|----|----|
| 一社人自東新 | 力 | 事 |
| ↓ | | |
| 一社人自東新 | 請求 | 報告 |
| MB1 マイカ B1 アルファベット 原紙 縮刷 | | |
| MB2 マイカ B2 洋 中 朝 | | |
| 行 1F B1 B2 | | |
| 多 児 青 1F B1 B2 | | |

酒と煙草の使用興否を五五六戸、二六四八人に就き調べた所

第七九表 飲酒、喫煙者數

| | 總人口ニ對シ | | |
|--------|--------|------|-----|
| 飲酒するもの | 一九七戸 | 二五五人 | 一〇% |
| 喫煙するもの | 五〇九戸 | 六二二人 | 二四% |

第七九表に示す如く、飲酒する者、二五五人、總人數の一〇%、喫煙する者、六二二人、總人數の二四%である。酒は燗酒、濁酒(どぶろく)、藥酒(清酒)等であるが、後二者は酒精含有量少く、安價に酔を齎らす爲に主として燒酒が用ひられる。

煙草は長壽煙(荒刻、一包、五五瓦一〇錢)、興亞(紙卷二〇本一四錢)が大多數で、稀に綠(二〇本一二錢)等、稍、良質の煙草を使用する者も見られる。

飲酒、喫煙者の比較を示せば(文獻二二、一九)。

第八〇表 飲酒喫煙者數の比較(總人口に對する比率)

| | 本 調 査 | 東京市細民生計調査 | 静岡県農村調査 |
|-------|-------|-----------|---------|
| 飲 酒 者 | 一〇% | 一六% | 二四% |
| 喫 煙 者 | 二四 | 二五 | 二八 |

第八〇表に見る如く、飲酒者、喫煙者共に土幕民が最小の値を示して居る。

更に、之等飲酒喫煙者を有する世帯に就き、酒と煙草に對する月支出額を示せば、

第八一表 一戸當酒及び煙草代

| | 本 調 査 | 本所區極貧階級調査(文獻二〇) |
|-------|-------|-----------------|
| 酒 代 | 一・二五 | 二・二五 |
| 煙 草 代 | 一・八七 | 二・五九 |

第八一表に見る如く、酒代一九七戸平均月一・一五圓、煙草代五〇九戸平均一・八七圓に過ぎず、金額に於ても、他の同種の調査より少い。生活苦を一時の酔に紛らす爲か、自暴自棄からか、或は逆に、酒に溺惑した爲に貧困に陥つたのか、理由は兎も角、極貧生活者中に大酒家の多い事は一般の見解であり、貧民窟と酒とは密接な關係を有すると思惟されるのであるが、土幕民が斯く、數に於ても、金額に於ても他の調査値より少いのは注目し得る。彼等の類を絶した貧困の爲、酒に溺惑する餘裕がないのか、或は其の他何等かの精神的原因に起因するか不明であるが土幕民の示す斯かる傾向は注目すべきである。

(註) 現地調査に當つて、近來酒價が高騰し斷酒乃至節酒禁酒するに至つたと稱する者が多かつた。

第八章 教 育

本章に於ては彼等の教育程度、國語理解能力、學齡兒童就學率等に就て述べる。

第一節 教 育 程 度

一〇三八の世帯主に就き、その教育程度を調べた所、

第八二表 世帯主教育程度

| | | | |
|----------------|-----|---------------|------|
| 學歷なきもの | 五四人 | 漢文塾に學びし事のあるもの | 二七人 |
| 小學校中退又は四年修了のもの | 八人 | 小學校を卒業せるもの | 一一人 |
| 不明 | 三人 | 計 | 一〇三八 |

第八二表に示す如く、學歷なき者五四%で最も多く、漢文塾に通ひし者二七%で之に次ぎ、小學教育を受けた者は少い。

漢文塾とは内地の寺小屋に類するもので、千字文、通鑑綱目、程度の高いものでは四書五經等を教へる漢文の私塾である。之が二七%の高率に達する事は、彼等世帯主の少年時代以前の朝鮮に於ける漢文教育の普及を暗示するものとして興味ある現象である。

之を大阪市に在住する朝鮮人労働者の値(文獻二)と比較すれば、第八三表に示す如くである。兩者の優劣は斷定し難いが、共に教育程度の著しく劣つて居る事は明瞭で、朝鮮人労働者の示す一樣相として注目し得る。

第八三表 世帯主教育程度

| | 本調査 在大阪朝鮮人労働者 | | 本調査 在大阪朝鮮人労働者 | |
|----------|---------------|-----|---------------|-----|
| | 五四% | 六二% | 二七% | 一四% |
| 學歷なきもの | 五四% | 六二% | 二七% | 一四% |
| 小學校中退 | 八 | 六 | 一一 | 一五 |
| 中等學校卒業以上 | 〇 | 二 | | |

次に世帯主に限らず、衛生調査表に依り二六〇六人の一般土着民中、八歳以上の者の教育程度を調べた所、

第八四表 教育程度

| 男子 | | | | | | | | |
|----------|-----|------|-------|-------|-------|------|-----|-----|
| 年 齡 | 程 度 | 八—十四 | 一五—一九 | 二〇—二九 | 三〇—三九 | 四〇以上 | 計 | 百分比 |
| 中學校卒、中退 | | 一 | 一 | 一 | 一 | 一 | 一 | 〇 |
| 小學校卒業 | | 一 | 一六 | 八 | 七 | 一 | 三三 | 五 |
| 小學校中退、在學 | | 九九 | 二二 | 五 | 二 | 一 | 一三八 | 二二 |
| 諺文のみ理解す | | 二三 | 二四 | 四七 | 四五 | 九四 | 二二三 | 四〇 |
| 全然文盲なるもの | | 七〇 | 一〇 | 一九 | 二八 | 六五 | 一九二 | 三三 |
| 計 | | 一八三 | 七二 | 七九 | 八二 | 一六一 | 五七七 | 一〇〇 |
| 女子 | | | | | | | | |
| 年 齡 | 程 度 | 八—十四 | 一五—一九 | 二〇—二九 | 三〇—三九 | 四〇以上 | 計 | 百分比 |
| 女學校卒、中退 | | 一 | 一 | 一 | 一 | 一 | 一 | 〇 |
| 小學校卒業 | | 一 | 一 | 三 | 一 | 一 | 四 | 一 |
| 小學校中退、在學 | | 五九 | 三 | 一 | 一 | 一 | 六三 | 九 |
| 諺文のみ理解す | | 七 | 一六 | 三六 | 二六 | 一六 | 一〇二 | 一五 |
| 全然文盲なるもの | | 一〇五 | 二二 | 九三 | 二二六 | 一五三 | 四九九 | 七五 |
| 計 | | 一七一 | 四二 | 一三二 | 一五二 | 一七〇 | 六六七 | 一〇〇 |

第八四表に示す如く、小學卒業以上の學力を有する者、極めて少く、男女通じて、僅かに三七人に過ぎない。之に反し小學在學中又は小學中途退學者、男女計一九二名の多數に上つてゐるのは、本表が、弘濟町、敦岩町の土幕部落内特殊小學校の生徒を含む爲で別段の意味を有しない。

諺文は朝鮮假名であるが、小學在學中、小學中退以上の者は總て之を解すると見做して宜く、八歳以上の男子の六七%、同じく女子の二五%が諺文だけは理解する譯である。

男女比較して、女子の教育程度が著しく劣つて居るのは注目すべきである。

諺文すら解し得ない文盲者が、男子一九二八、女子四九九名の多數に及び、本表に除外した。一三五六人の七歳以下の兒童を總て、文盲と見做すなら、二六〇六人中、文盲男女を通じて二〇四六八、總數の七七%の高率に達し、土幕民の教育程度は極めて寒心すべき状態にある。

比較を示せば、内務省社會局により調査された東京市細民(文獻三三)の中、假名さへ解しない文盲者、男子の一七%、女子の二四%、男女通計、文盲者は總數の一九・六%に過ぎず、内地と朝鮮の義務教育實施當否に依るとは云く、土幕民の値は内地細民の夫に遙かに及ばない。

第二節 國語理解力

次に同じく二六〇六人の土幕民の衛生調査表に就き、國語理解能力を調べた所、

第八五表 國語理解力

| 男 子 | | | | | | | | | | |
|------------|----------|---|---|----|----|----|----|------|-----|-----|
| 程 度 | 年 齡 | 八 | 九 | 一〇 | 一四 | 一五 | 一六 | 一七以上 | 計 | 百分比 |
| | 自由に使へるもの | | 一 | | 一 | 八 | 二 | 三 | 八 | 六五 |
| 意味を通ずるもの | | 一 | 八 | 五〇 | 二 | 三 | 二 | 一 | 一四二 | 三五 |
| 全然理解し得ないもの | | 四 | 九 | 四 | 八 | 二 | 六 | 一 | 三七一 | 六四 |
| 計 | | 六 | 七 | 一 | 一 | 六 | 七 | 二 | 五七七 | 一〇〇 |
| 女 子 | | | | | | | | | | |
| 程 度 | 年 齡 | 八 | 九 | 一〇 | 一四 | 一五 | 一六 | 一七以上 | 計 | 百分比 |
| | 自由に使へるもの | | | | 一 | 四 | 三 | 三 | 一 | 一〇 |
| 意味を通ずるもの | | 一 | 四 | 二〇 | 二 | 六 | 一〇 | 六 | 五八 | 九 |
| 全然理解し得ないもの | | 四 | 八 | 四 | 五 | 三 | 三 | 一 | 一九九 | 九〇 |
| 計 | | 六 | 二 | 一 | 〇 | 九 | 四 | 二 | 一三三 | 一〇〇 |

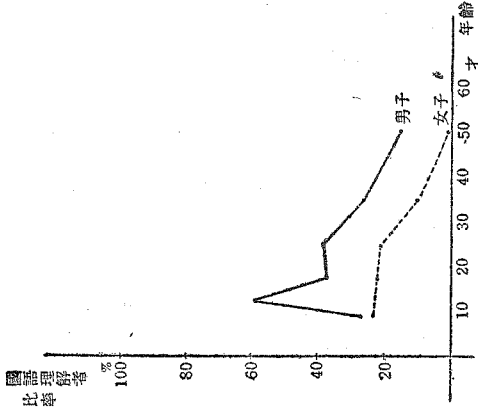
第八五表に見る如く、八歳以上の土幕民中自由に國語を使ひ得る者男子に於て、一一%、女子に於て、僅かに一%に過ぎず、何うにか意味を通じ得る程度の者と雖も、男子三五%、女子九%の低率である。

數へ年七歳以下の者一三五六人は總て、國語を解し得ないと見做してよく、之をも加へる時は、二六〇六人中、國語を解し得る者、男女計二七四人、總數の僅か一〇・五%に過ぎない。

之を昭和十四年末現住朝鮮人二千二百九萬八千三百十人中の國語理解者(文獻二四)と比較すれば、不自由なるも意味を通ずる程度のもの、及び自由に國語を話し得る者、合せて一三・八%であるが、本調査では一〇・五%を示し、都會地なるに拘らず、その普及の状態は全鮮の平均にも及んでゐない。之は全羅南道の一〇・四%にほぼ匹敵し、全鮮一の普及率を示す京畿道の一九・三%に遠く及ばない。

國語を自由に話し得る者及びどうか用を辨する程度のもの全人口に對する比率を圖示すれば第一五圖に示す如くである。

第十五圖 年齢別國語理解者比較



つゝある事を示す。

第一五圖に明らかなる如く、男女とも若き世代程高率を示し、將來漸次に國語普及状態が良好になるであらう事を暗示して居る。

一〇―一四歳が最高率を示し、男子五九%、女子二二%に達して居るが、之は先にも述べた如く、特殊小學校生徒を加算した事が、その一因をなして居る。

第八四表に示せる男女教育程度の差異に一致して、國語理解力も、男子に比し女子が著しく劣つて居るが、二〇歳以下に於ては、男女の差が減少し、近來國語が女子の間にも漸次普及し

第三節 兒童就學率

五五六戸に就ての一般調査中、數へ年七―一六歳の者男子二一九人、女子二二一人の就學、就業の状態を見るに、

第八六表 兒童の就學又は就業の状況

| 年齢 | 七 | 八 | 九 | 一〇 | 一一 | 一二 | 一三 | 一四 | 一五 | 一六 | 計 | 百分比 |
|---------|---|---|---|----|----|----|----|----|----|----|-----|-----|
| 種別 | 七 | 八 | 九 | 一〇 | 一一 | 一二 | 一三 | 一四 | 一五 | 一六 | 計 | 百分比 |
| 小學校に通ふ | 男 | 八 | 二 | 九 | 三 | 二 | 二 | 二 | 一 | 五 | 九七 | 四四 |
| 職業を有する | 男 | 一 | 一 | 一 | 二 | 二 | 三 | 二 | 一 | 五 | 二〇 | 九 |
| 家で遊んでゐる | 男 | 三 | 九 | 二 | 六 | 七 | 一 | 七 | 五 | 二 | 一〇二 | 四七 |
| 計 | 男 | 四 | 七 | 四 | 五 | 四 | 〇 | 四 | 一 | 三 | 二一九 | 一〇〇 |
| 女 | 四 | 六 | 四 | 〇 | 五 | 〇 | 四 | 三 | 三 | 三 | 二二一 | 一〇〇 |

第八六表に見る如く、七―一六歳の男兒の就學せる者四四%、女兒の就學せる者二〇%、男女通算して三三%しか就學して居ない。

數へ年七―一六歳を學齡兒童と見做し、一般朝鮮人(文獻二五)及び東京市細民(文獻二六)と、その就學率を比較すれば、第八七表に見る如く、土幕民兒童の就學率は京畿道一般朝鮮人の夫より稍、優り、流石に都會地に住み、教育施設の

恩恵をより多く蒙つてゐることを示す。義務教育を受ける内地の細民と比較する事は妥當を缺くが、土幕民児童が就學、就業、共に著しく劣つて居る。

第八七表 學齡児童就學率比較

| | 本調査 | 京畿道朝鮮人 | 東京市細民生活調査 |
|-----|-----|--------|-----------|
| 就學者 | 三三% | 二八% | 六七% |
| 就業者 | 八 | 一 | 二 |

(註) 全京畿道内の學齡児童(滿六歳—十五歳)數は、五三〇、八〇三人で、全道内の朝鮮人對内地人の數の比率は、約二二八對一七である(文獻二)。之より算出した全道内朝鮮人學齡児童數は約四九四、七六〇人である。京畿道内昭和十三年度、官公私立朝鮮人小學校児童總數は一三八、三五〇人である(文獻二)。照値から、京畿道内朝鮮人學齡児童就學率を計算した所二七・九%であつた。

第九章 土幕民の將來

以上章を造つて記述した如く、人間生活として想像し得る最下位の極貧生活を爲しつゝある彼等が、將來或程度の生活の向上を期し得るであらうか。或は、夫以上更に惨めな生活に墜落するであらうかを推論する事は、極めて困難な問題で、速斷を許さない。五五六戸の土幕民中一九五戸の土幕生活五年以上に及ぶ者と、二〇二戸の土幕生活五年未滿の者の生活程度を比較するに、

第八八表 生活階層級別土幕經驗有無

| 生活階級 | 上階層 | 中階層 | 下階層 | 計 |
|---------------|------------|-------------|------------|------|
| 土幕生活五年以上に及ぶもの | 二七戸(二三・九%) | 一〇三戸(五二・八%) | 六五戸(三三・三%) | 一九五戸 |
| 土幕生活五年未滿のもの | 二三(二六・三%) | 一六六(五七・五%) | 五三(二六・二%) | 二〇二 |
| 計 | 六〇 | 二一九 | 一二八 | 三九七 |

第八八表に示す如く、土幕生活五年以上にして、上階層に屬する者二三・九%、五年未滿にして上階層に屬する者一六・三%、同じく下階層に屬する者に於て五年以上の者三三・六五%、五年未滿にして、下階層に屬する者二六・二%で、概して、土幕生活長年月に亙る者の生活が劣つて居る。土幕民乃至は都市細民としての經驗が永い程、漸次環境に慣れ、順應し、當然生活が向上する筈であるのに、逆の結果を示して居るのは、彼等の悲惨極まる歪曲された生活は、永年の間に彼等の精神及び肉體を蝕み、却つて生活の低下を來したものであると思はれる。

更に、一〇三戸に就き、將來に對する希望、見込を訊ねた所、その結果は第八九表に示す如くである。

第八九表 將來に對する希望

| | |
|------------------|-----|
| 1. 現職業の發展を希望するもの | 一七戸 |
| 2. 商賣をしたいと云ふもの | 七戸 |
| 3. 其の他轉業を望むもの | 三戸 |
| 4. 滿洲へ行きたいと云ふもの | 一戸 |
| 5. 歸農を望むもの | 四戸 |

| | | |
|-----|-----------------------|------|
| 6. | 子女の教育を望むもの | 八戸 |
| 7. | 子供に技術を習得させたいと云ふもの | 七戸 |
| 8. | 子供が成長し家計を助けるのを待つと云ふもの | 一一戸 |
| 9. | 別に希望を有しないと稱するもの | 三七戸 |
| 10. | 不詳 | 八戸 |
| | 計 | 一〇三戸 |

別に希望を有しないと稱する者三八戸で最も多く、爾他の希望を有する者と雖も、一般に取り立てて希望と言ふに足らない程度の者が多く、彼等の將來に對する見通しは概して悲觀的である。彼等の大部分が農村出身であるに拘らず、歸農又は滿洲移民を望む者の意外に少いのは注意すべきで、その實現性の少い爲であらうと思はれる。

子女の教育を望む者、子に技術を習得させたいと稱する者相當多く、人情の常として子女の成功を嚮望するに變りはないが彼等の場合には純粹な親心の他に、功利的色彩を多分に帯びて居るのは、先づ生きなければならぬ貧困生活の然らしめる所であらう。

本表に示す各項目を通じて、概して消極的傾向が強く、積極的に現状を打破し、より良き生活へ飛躍しようとする努力は殆んど觀はれない。

斯かる消極性は、繰返される希望の挫折と、永年の貧困の末、彼等の胸裡に宿した諦觀に因るものか、彼等生來の運命及び力強き者に對するもどかしい程の柔順さに因るものか、その何れがより主な原因を成すかは明らかにし難いが、彼等が斯く没法子的諦觀の下に悲慘な極貧生活に沈淪し、積極的意志を失つて居る事は、彼等の救済策を講ずる

に當つても注意すべき事であらう。

第十章 結 論

以上諸章に述べた所を總括結論すると、

- (一) 土蕃民とは、一般朝鮮人と血族的に同一の要素よりなる都市細民群である。
- (二) 土蕃民の生活状態は、衣食住其他凡ゆる點より眺めて最も悲慘で、日本領土内諸細民群中、最下位に位するものと思はれる。
- (三) 彼等の數は累年急激な率を以て増加の一途を辿りつゝあり、京城に於ける現在數は三萬數千人に達すると推定される。
- (四) 斯かる京城土蕃民の約三分の二は貧農の離村回都せる者で他は都市原住貧困生活者である。
- (五) 土蕃民に類する悲慘な生活をなす者は朝鮮の農村、都市に普く見られ、將來土蕃民は之等を源泉とし、根強い勢で繼續されるべく、殊に農村からの流入が盛んであらうと推察される。
- (六) 人口論的に觀察すれば、二〇歳臺三〇歳臺の青壯年少く、婚姻は抑制され出生率低く子女死亡率著しく高く極貧者特有の現象を示して居る。
- (七) 職業は日稼労働者、人夫、職工、行商等肉體労働者が絶對多數を占め、特殊技能を有する者は少い。近年

の物價貨銀の昂騰に拘はらず、彼等平均一日収入男子一・二〇圓、女子〇・五六圓に過ぎない。女子の就業率が殊に低い。

- (八) 總支出中、飲食費が大部分を占め、總収入額の七一%に達する。
- (九) 負債一戸當三四・〇八圓で、甚だしい者は貧困の餘り借金さへ出来ない者が少くない。
- (十) 住居の惨めさは殊に甚だしく、家とは名のみの掛小屋程度の物が多く、一室居住者總戸數の八割以上に達し、一人當平均居間坪數は〇・四五坪で、一疊に満たない。
- (十一) 一人當衣類數、夏物、袷、冬着合せても、三・五着に過ぎず、着のみ着の儘の者が過半數である。一戸當平均夜具數は掛蒲團一・六枚、敷蒲團一・四枚に過ぎない。
- (十二) 土着民成人男子の一日に攝取する總熱量は約二七七〇カロリーである。副食物は一般に蛋白質、脂肪質乏しく、味噌の如き最も安價な蛋白源すら充分に攝り得ない者が相當多い。
- (十三) 土着民の八割以上は諺文(朝鮮假名)さへ解し得ない文盲で、不充分ながら國語を解する者は總數の一割に過ぎない。
- (十四) 斯かる惨めな生活を營みつゝある彼等土着民は、何等積極的希望を有せず、極貧生活に沈淪して、唯々日々の生活に汲々として居る。
- (十五) 此等土着民に對して、管轄官廳の見るべき對策なく、その將來は眞に憂慮すべき状態にある。

參考文獻

| (文獻番號) | (著者、或は發行者) | (書名) | (發行年月) |
|--------|------------|--------------------|-----------|
| 一 | 朝鮮總督府 | 朝鮮總督府統計年表 | (昭和十六年) |
| 二 | 〃 | 昭和十年度國勢調査報告 | (昭和十三年) |
| 三 | 〃 | 朝鮮小作年報 | (昭和十三年) |
| 四 | 〃 | 農家經濟の概況とその變遷 | (昭和十五年) |
| 五 | 〃 | 朝鮮社會事業要覽 | (昭和十三年) |
| 六 | 京城府 | 京城府社會事業要覽 | (昭和九年) |
| 七 | 米谷豊一 | 貧困人口構成問題(社會政策時報) | (昭和十二年) |
| 八 | 〃 | 離村回都の經濟學的原因(都市問題) | (昭和十二年) |
| 九 | 商工省 | 全國小賣物價月報 | (昭和十五年七月) |
| 一〇 | 商工會議所 | 東京市勞働賃銀統計 | (昭和十五年七月) |
| 一一 | 金浩植 | 朝鮮人の食生活(國民生活論叢第二輯) | (昭和十六年) |
| 一二 | 高井俊夫 | 朝鮮住民の食に関する觀察 | (昭和十五年) |
| 一二の三 | 廣川幸三郎 | 朝鮮食の營養學的組成(第一報) | (昭和十六年) |
| 一三 | 暉峻義等 | 社會衛生學 | (昭和二年) |
| 一三の三 | 暉峻義等 | 社會衛生學 | (昭和十年) |
| 一四 | 京城府 | 京城府土着民調査書 | (昭和十三年) |
| 一四の二 | 京城府 | 京城府土着民資料 | (昭和十四年) |

| | | | |
|----|-----------|-------------------|------------|
| 一五 | 朝鮮農村衛生調査會 | 朝鮮の農村衛生 | (昭和十五年) |
| 一六 | 東京府 | 在京朝鮮人労働者の現状 | (昭和四年) |
| 一七 | 東京市 | 在京朝鮮人労働者の現状 | (昭和十年) |
| 一八 | 大阪府 | 在阪朝鮮人の生活状態 | (昭和九年) |
| 一九 | 内務省 | 静岡縣周智郡宇刈村保健衛生調査報告 | (大正十年) |
| 二〇 | 竹中多計 | 都市貧困生活に関する調査記録 | (都市問題第八卷) |
| 二一 | 東京市 | 東京市要保護者生活調査 | (昭和七年) |
| 二二 | 内務省 | 細民生活状態調査 | (大正十一年) |
| 二三 | 内閣統計局 | 家計調査 | (昭和十年) |
| 二四 | 朝鮮總督府 | 調査月報 | (昭和十五年六月) |
| 二五 | 寺尾琢麿 | 經濟統計學 | (昭和十五年) |
| 二六 | 改造社 | 朝鮮經濟年報 | (昭和十五、十六年) |
| 二七 | 朝鮮總督府 | 水原郡生活状態調査 | (昭和四年) |
| 二八 | 〃 | 平壤府生活状態調査 | (昭和七年) |
| 二九 | 〃 | 朝鮮の人口問題 | (昭和十年) |
| 三〇 | 内閣統計局 | 大日本帝國統計年鑑 | (昭和十四年) |

第三篇 衛生調査

第一章 體格

一 序

身體の發育は先天的素質と生後の生活環境によつて決定される。土幕民の先天的素質は知るよしもないが、否今日の土幕民の成人は本來の土幕民ではなく、後年に土幕民になつた人々である。従つて土幕民の先天的素質があらはれるとすれば、今日の土幕民の子供より始まつて數代してあらはれる筈である。

しかし生後の生活環境少くとも土幕生活に入つてからの生活狀況は生活層で詳しく觸れてある。啄木の働けどの歌ではないが彼等の四割餘が肉體労働者、日僱労働者である。そしてその収入の大半が食費に當てられ、正に食べては働き、働いては食べてゐる有様である。

従つて體即ち健康が唯一の彼等の資本である。

二 資料並びに測定方法